12月師走(しわす)　大雪、冬至の月になりました。

12月7日大雪です。21日冬至、25日クリスマスです。31日大晦日となっております。

冬至の日に柚子を浮かべた風呂に入ると風邪をひかないという言い伝えがあります。これは5月節句の菖蒲と同じように身を清める禊の名残とされているのでしょう。この冬を無事に乗り越え暖かい春を迎えるためにとの願いでしょう。実際に柚子には冷え性や神経痛、腰痛などを和らげる血行促進の効果があるそうです。ぜひ試してみてください。

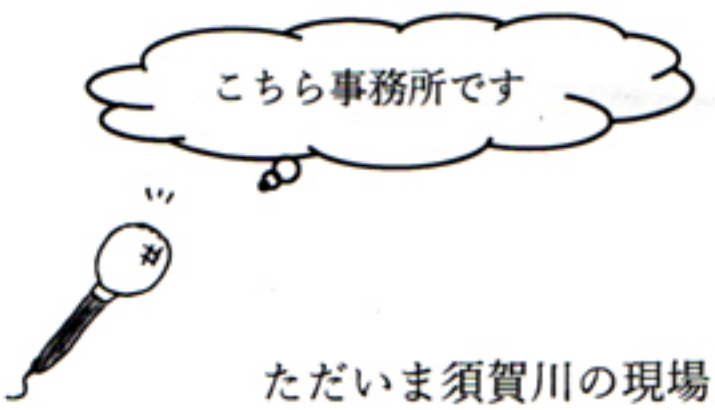
今年もあとわずかとなりましたが、皆様には本当にお世話になりました。

厚く御礼申し上げますと共に、来る年もよろしくお願いいたします。

良いお年を迎えられますようお祈り申し上げます。

幸田常一

＊＊



ただいま須賀川の現場をお世話になっております。

夢を見続ける男　NO８０

坂本竜馬暗殺のこと

NO７８で明智光秀の織田信長討伐を取り上げたが、今回は幕末の坂本竜馬暗殺のなぞ解きをしてみたい。竜馬暗殺も有力節はあるものの、定説なるものは未だない。なぜこれを取り上げるのか。特に深い意味合いはないが、敢えて言えば戦国時代の有力武将の話と比べ、下級藩士（土佐藩・現高知県）で脱藩した身ながら、歴史的転換期の中で大きな役割を演じて散った若者の話という意味では異彩を放っていると思う。しかも竜馬は、脱藩したのは２８歳、暗殺されたのが３３歳で、その活躍舞台は５年という短期間なのである。竜馬のイメージは司馬遼太郎著の「竜馬がゆく」によって創られたといってもよい。小生も読んだ。今もその長編小説５部作が我が家にはある。また、NHK の大河ドラマでも取り上げられ、強烈な印象を国民に与えた。国家の行く末を巡って波乱に満ちた幕末の時代に、一人の若者がさっそうと登場して縦横無尽の活躍をし、一定の成果を挙げつつも志半ばで刺客によりその若き命を落としたのである。その暗殺のあった日が慶応３年１１月１５日（１８６７年１２月１０日）で、西暦でいうと１２月、年の暮れの時期である。

では、竜馬暗殺のあった年というのは、幕末のいつ頃かと言えば、何と明治を迎える前の年で、その年の暮れなのである。徳川幕府が崩壊し、明治となる直前の時期である。竜馬暗殺があった直後から武力倒幕への動きが一挙に加速する。それが戊辰戦争である。その仕上げとして会津攻めがなされ、会津藩が白旗を挙げて、明治へと改元（慶応４年１０月２３日・１８６８年９月８日）がなされる。竜馬暗殺からわずか１０ケ月後だ。これで２００年続いた徳川幕藩体制は幕を閉じ、薩長閥を中心とする新政府が誕生する。

さて、竜馬の活躍の舞台であるが、それは「大政奉還」までであった。幕末動乱の動きを辿ると、事の起こりは嘉永６年・７年（１８６３年・４年）のアメリカ・ペリーの浦賀来航である。これにより幕府は条約を締結し、開国することにした。しかし、この条約締結は朝廷の勅許をえないままであった。開国を巡り国論は、開国派と攘夷（外国を排斥）派に分かれ、さらに尊皇派と佐幕派に分かれ、そして尊王と攘夷が結び付き尊王攘夷の考えも生まれる（時の孝明天皇は攘夷の考えであった）。また、公武合体（幕府が朝廷と協力して政治を行う）という考えも出てくる。実際の動きは、それぞれの立場・考えが絡み合って、単純に割り切れるものではないが、結局は雄藩の動向が鍵を握っていた。雄藩と言えば、幕府が動向を気にしていたのは、薩摩藩（鹿児島県）と長州藩（山口県）であった。

それではここで、「大政奉還」までの主な動きを概観してみたい。

(注)大政奉還：幕府が政権を天皇に返上すること

嘉永７年（１８５４年）：アメリカと幕府が「日米和親条約」を締結・開国
安政５~６年（１８５８~９年）：安政の大獄（幕府が尊王攘夷派を過酷に弾圧）
安政７年（１８６０年）：桜田門外の変（幕府の大老井伊直弼暗殺される）
安政８年(１８６１年)　：孝明天皇の妹・和宮が１４代将軍家茂に降嫁（公武合体）
文久３年（１８６３年）：長州が攘夷結構・外国船を砲撃
　同年　　：薩摩・英国(イギリス)戦争
元治元年（１８６４年）：禁門の変（長州藩が会津藩を京都から排除するため挙兵）
　同年　　：幕府の第１次長州（反幕府の動き）征討（長州が敗戦）
　同年　　：四か国連合艦隊が下関（長州）を砲撃
慶応２年（１８６６年）：第２次長州征討（両軍の停戦合意・実質長州の勝利）
　同年　　：征討の最中将軍家茂が死去し、慶喜が１５代将軍に就く
慶応３年（１８６７年）：大政奉還（慶応３年１０月１４日・１８６７年１１月４日）

実にペリー来航から１３年にして「大政奉還」がなされるに至るのである。

それでは、次に竜馬が暗殺されるまでの主な動きを見てみよう。竜馬は土佐藩を脱藩するまで藩の土佐勤皇党に属していた。尊王の考えの持ち主であった。そして脱藩後幕府の勝海舟に出会って門下生となり、世界に眼を開かせられて開国の考えになる。その後、竜馬は薩摩の出資を得て、貿易会社「亀山社中」を結成した（慶応元年・１８６５年)。この亀山社中の活動を通して、政治がらみの仲介もするようになり、やがて竜馬の仲介により「薩長同盟」(薩摩と長州との盟約）となって実を結ぶのである。この同盟締結に至るには竜馬の盟友中岡慎太郎の働きも大きかった（この中岡が竜馬暗殺の場に居合わせ、横死してしまう)。この同盟が成立したのは慶応２年（１８６６年）１月２２日のことであった。竜馬は頼まれてこの同盟を約する書類に仲介者として裏書をしている。
そしてあの有名な「船中八策」を策定し、土佐藩の後藤象二郎に示したのが慶応３年６月９日である。この八策には「王政復古・大政奉還」が冒頭に盛り込まれていた。これを受けて早速後藤は動き始めた。土佐藩で雄藩をリードせんとしたのである。前藩主山内容堂の了承を取り付け、さらに薩摩藩と王制復古の盟約を結ぶ（６月２２日)。その後曲折を経て１０月６日終に山内容堂や後藤象二郎らの連名で幕府の老中・板倉勝静に「大政奉還建白書」が提出される。日にちを置いて将軍慶喜の断が下り、１０月１４日に慶喜から天皇に「大政奉還」」が上奏され、翌１５日に天皇より勅許が下る、という展開であった。
ところが、後に分かることだが、実は上奏された同じ日に天皇より薩摩・長州に「倒幕の密勅」が下されたのである。これは薩摩・長州と組んだ朝廷の岩倉具視の陰謀といわれる。このように、あくまで「倒幕」という形で「王政復古」を実現しようという動きが、一方で強まっていたのである。その倒幕の方法も「武力」によるものだ。つまり、この考え方は新政府から完全に「徳川幕府を排除」しようとするものだった。
これに対して、竜馬は大政奉還した幕府を新政府から排除するとは考えていなかったし、ましてや武力による、日本人同士が血を流し合う武力による倒幕はやるべきでないと考えていた。建白書を提出した土佐藩も当然同じである。しかし、幕府から２回の征討を受けた長州藩は藩挙げて、それと薩摩藩でも京都駐在の西郷や大久保らはあくまで「武力倒幕」を目指していたのである。それにはどうしても、朝廷からの錦の御旗を必要とした。ついにその錦の御旗を手にして戊辰戦争に踏み切り、武力倒幕へと突き進む。
それでは、最後に竜馬は大政奉還から１か月後、なぜ、誰に暗殺されてしまったのかをみてみよう。刺客について、有力説は、京都見廻り組の与頭佐々木只三郎（会津藩）以下配下の者であるというのである。京都見廻り組というのは、幕府が京都の治安維持のために設置した組織である。見回り組が竜馬を暗殺したと分かったのは、明治３年に元見廻り組の今井信郎が自供したことによる。それは、慶応２年（１８６６年）の寺田屋事件の時竜馬が拳銃を使い、捕り方を射殺してしまった件で捕えるためだったというのである。これは自供のみで、裏付けるもの（当時の組の記録）はない。この自供に疑問が残るのは、捕らえるためなら、切り合いはあるにしても、竜馬が刀を持たない状態にあったにもかかわらず、惨殺するまでの必要はない。当初から殺すつもりでやったとしか思えない。では寺田屋事件の敵討ちとしてやったのか。それにしては事件から２年近く経っており、しかも大政奉還がなされている時期である。どうも見回り組がやったという理由が見当たらず、合点がゆかない。そうではなく、大政奉還を受けて新政府の在り方（その時、竜馬は既に幕府参画を認める新政府要綱を作っていた）を巡り、竜馬の存在（影響力）を邪魔だとする立場の者ならやりかねないと思うがどうだろうか。そう考えると、刺客はいずれであれ、あくまで武力倒幕により、新政府からの幕府排除を期す薩摩藩の西郷黒幕説も捨てがたい。と筆者はそう考えてしまうが、皆さんはどう思われるだろうか。

初冬の那須岳（連峰、百）・茶臼岳

里は晩秋、山は初冬。晩酌をしていたら、週末は天気が下り坂、里にも雪が降るかも知れないとの予報で、妻の勧めで急きょ翌日に山に行くことにし、場所は那須岳（連峰）とした。

那須岳には10回近く行ってるが、いつも連峰最高峰の三本鎗岳（福島県・栃木県境、さんぼんやりだけ1917m、ねじりはちまき174号）をメインに登っていた。福島県側下郷町の大峠や西郷村の赤面山（1701m）を経由するコースとか、ロープウェイ駅のある栃木県那須町側から茶臼岳（ちゃうすだけ1915m）にも登っている。

11月24日（火）、今回は、初めてのルートで那須塩原市の板室温泉先の沼原（ぬまっぱら）湿原の駐車場から白笹山（しらささやま、1719m）、と南月山（みなみがっさん、1776m）を経由して茶臼岳に挑戦することにした。

準備不足で自宅出発が遅れ、東北道那須ＩＣを降りて白笹温泉郷別荘地を抜け、沼ッ原調整池の駐車場に着いたのは9時10分だった。100台以上駐められる駐車場には、5～6台、立派なトイレもあった。

9時40分、寒さ対策として雨具の上着を着て出発、時間を見ながら途中で引き返しても良いと思いながら、視界のない樹林帯の中を登って行く。そんなに急な所もなく、岩の転がる涸れ沢や鉄パイプの橋を渡ったり、ところどころ仮払いしてある背丈ほどの笹藪の急登を登って行く。樹林が切れている所には薄らと数ミリの粉雪があった。左下方には樹林の間から深緑色の調整池が見える。霜柱を踏む音と感触が面白い。その日の人の踏み跡はない。

11時過ぎ白笹山山頂の標識のある所に着くが幾種類かの灌木の群落の中にあり山頂の感じではない。一端下って鞍部になり南月山に至る稜線上を登り返すと、群青の空の下、稜線の北側は広葉樹が樹氷となって白い桜が咲いたようだ。日当たりの良い南側にはなく気温の上昇とともに落花したようだ。

11：50着、南月山神社の祠の後ろ側が南月山山頂だった。高い樹木のない山頂は小広く若者と熟年の登山者が休んでいた。眺望が開けていて中腹から噴煙を上げる、縦じまの微妙に異なる茶褐色の茶臼岳が群青の空の下に鎮座していた。二人から茶臼岳までの所要時間や下山ルートなどのアドバイスを貰い、明るいうちに下山できるか不安だったが茶臼岳山頂を目指すことにする。茶臼岳山頂部をほぼ水平に、囲む登山路を、赤色や黄色の登山者が歩いている。

10分ほど休み出発する。高低差のあまりない所を進み一端下って牛の首を目指す。耳鳴りかと思うような重低音の音が聞こえている。海原を動くフェリーのエンジン音のようだ。気のせいかと思い、対向してきた登山者に確かめてみたら、確かに音がしているという。地下のマグマの音と思うと無気味だ。

日の出平には熟年男性が一人休んでいた。ゴンドラ利用の人で南月山まで行

くとのこと。牛の首や、硫黄の臭いがして噴煙が上がる「無間地獄」から見上げる山頂部は火山岩がゴロゴロし、迫力がある。避難小屋方向に左回りに進む。

13 時過ぎ、避難小屋手前の山頂への分岐から、両側にロープが張ってある岩場の間を縫って山頂を目指す。男の子を含むファミリーが登って行く。お釜周回コースを経て、13：43 山頂着。駐車場から 4 時間かかった。ゴツゴツした岩の間に立つ山頂標識よりも高い岩の上に石造の那須岳神社があった。お参りする。

ほとんど飲まず喰わずだったので、腰を下ろし持参のおにぎりを頬ばる。下山途中で暗くなった場合はヘッドランプを使うことを覚悟する。何組かの軽装の登山者がいたが皆ゴンドラ利用のようだ。

近くでお湯を沸かしカップヌードルを食べていた中年男女のペアとあいさつを交わしたら、あったかいコーヒーを飲むかい？と聞かれたので遠慮せずにいただくことにした。男性はザックではなくショルダーバッグだった。

山頂からは 360 度の展望が広がっている。南西側には自分が辿った南月山や白笹山が眼下に見えている。南東側には那須町や黒磯の市街地がうすぼんやりと見えている。空気が澄んでいる山岳部はかなり遠くまで見渡せた。富士山までは同定できなかったが。

北側には那須岳の一部である、朝日岳（1896m）から三本鎗岳（1917m）に至る月面を思わせる赤や黒の茶化色の山塊が連なり、とりわけ最高峰三本鎗岳山頂部は筋状に雪が残っている。その西側には裏那須と言われる流石山（1813m）から大倉山・三倉山（1885m、1888m）の連山がきれいなスカイラインを描いて横たわっている（ねじりはち 241 号）、少し離れた南西側には男鹿山塊の最高峰大佐飛山（おおさびやま 1908m、登山道なし）、まだ登っていない男鹿岳（○おじかだけ 1777m、ねじりはち 237 号）、北側遠くには上部が白い飯豊連峰も見えていた。

もっと居たいが明るいうちに下山したいと思い 14：10 下山開始、牛の首まで戻り姥ヶ平を経由する。低木の高原状の姥ヶ平からは終わりかけた紅葉の先に、茶臼岳が噴煙をまとわりつかせていた。三斗小屋温泉との分岐を左折し沼ッ原調整池を目指す。誰もいない駐車場に戻ったのは薄暗くなってきた 16：40 だった。ヘッドランプは使わなかったがギリギリの状態だった。近間の山でももう少し計画的に準備する必要があると思った。

初冬とは思えない群青色の空の下、那須岳・茶臼岳登山を無事終える。春の天気の良い日に沼原湿原を散策し花々を眺め、板室温泉に浸かるのも良いと思った。

令和２年１２月　ＮＯ９７　　アンチ・エイジング　山旅遊人

＜商品紹介＞

『浴室暖房換気乾燥機』

気温が下がり冷え込む季節です。寒い浴室と熱いお湯の温度差により急激に血圧が変動するヒートショックが起こりやすい時期です。浴室暖房換気乾燥機は寒い季節の入浴を快適に楽しめ、安心して服を脱げます。換気の機能で衣類乾燥や、お風呂のジメジメ解消の手助けなどをしてくれます。寒さによる体への負担を軽減し、家事にも一役かってくれます。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

＜年末年始休業のお知らせ＞

令和２年 12/30(水)～令和３年 1/5(火)

まで、年末年始休業とさせていただきます。休業期間は何かとご迷惑をおかけ致しますがご了承のほどお願いいたします。

尚、1/6(水)は平常通り営業させていただきますので、よろしくお願いいたします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

令和２年 12 月５日発行

有限会社　幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢字八幡 1-1

電話　0243-44-3816

＜後記＞2020 年も残すところあと僅かとなりました。

本年も大変お世話になりました。

来年も社員一同、安心安全で皆様にご満足頂けるサービスを心掛けて参ります。　（ほしの）